

応接間のはじまり

宇敷 辰男

二月初旬、湯島から程近い台東区池之端にある旧岩崎邸庭園を訪ねた。ここは三菱財閥を創設した岩崎弥太郎が、六義園と清澄庭園共々明治十一年（一八七八年）に購入した場所である。

弥太郎が明治一八年に五〇歳で亡くなり、長男の久弥ひさやが若かったため、弟の岩崎弥之助すけが三菱の二代目になった。アメリカ留学帰国後、久弥は副社長として三菱に入り、明治二十七年に二九歳で三菱の三代目になった。旧岩崎邸は明治二十九年に、三代目の岩崎久弥の本邸として建造された。

完成当時は、洋館と、それを遙かにしのぐ五五〇坪の和館が連なっていた。洋館は公的な接客空間として使われ、生活の場である和館には五五名以上が暮らしていた。

むかし玄関近くに洋室の応接間があり、その奥に多くの和室がある住宅があった。旧岩崎邸はこのような和洋折衷建築様式の始まりで、久弥の留学先であったペンシルベニアのカントリーハウスのイメージが採り入れられている。

現在残っているのは洋館と、和館の一部だけれど、旧岩崎邸の、

・赤い絨毯が敷き詰められたメインルームの、立派な大理石の暖炉と高価なガラスを使った大きな鏡、

・色あせないイスラム調の象嵌ぞうがんタイルが敷き詰められた一階のベランダと、広い芝庭を見下ろし昔は房総半島や富士山が見渡せた二階のベランダ、

・シルクの刺繍を天井に施した婦人客室や、洋館と地下トンネルでつながる離れの接待ピリヤード場、

などを見て廻ると、当時の社交の場を想像することができた。

明治三〇年代になると都会の中流住宅に応接間が出現した。和館と洋館が簡略化された住宅形式が、大正から昭和前期にかけて広く普及していった。しかし戦後は次第に居間で来客応対をするようになった。

子供のころ、父方の祖父母が住んでいた家は空襲で無くなっていただけで、母方の家は残っていて応接間があった。ちよつと不思議な空間で従兄弟達と賑やかに遊んだ憶えがある。あの応接間はいま何処かに残っているのだろうか。